D・グレーバー著『官僚制のユートピア』（以文社）を読む

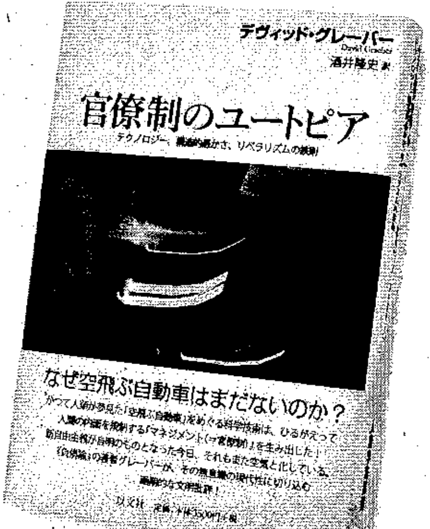
公文書の
改竄は
「未曾有」の
犯罪です

官僚制、くそったれ。

この世界は複雑さに満ちている

森 元斎
MORI Motonao

▼デヴィッド・グレーバー著、酒井隆史訳『官僚制のユートピア――テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』12・10刊、四六判三八六頁・本体三五〇〇円・以文社


デヴィッド・グレーバー
酒井隆史 訳
官僚制のユートピア
テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則
なぜ空飛ぶ自動車はまだないのか？

この世界は大変複雑にできている。官僚制は、この複雑な世界を反映させた仕方で展開されているように思えるものの、やはりこの世界とはずれており、民衆の生きる秩序とは異なる仕方で、複雑に展開されているものだ。だから複雑さに複雑さが重なって、とにかくややこしい代物なのだ。この世界の複雑さと、官僚制の複雑さは異なるということだ。官僚制の複雑さに対応できるのは、それを制度設計した者であり、いわばお受験で勝ち上がった人が操作できる。官僚制による複雑さで縛り上げられるのは、私たち民衆であり、体制側は縛られることがほとんどない。グレーバーが述べていないことかもしれないが、グレーバーの見立てから、こう考えることができる。官僚制の複雑さは私たちのそれとは異なる。だが、多くの国家の統治者やかれらを取り巻く官僚の眼には、この世界はシンプルなものに見えていると思う。かれらがバカだからではない。この世界にコミットして支配しているから、彼らの思うツボなのだ。だから、私たちとは異なる。私たちは二重の複雑さにあえぎ苦しむのだが、かれらは一重の複雑さ、しかもその複雑さを作り出している側であるがゆえに、この世界の自由を最も謳歌できるのだ。決まった形式を編み出し、その鋳型に流し込んでいさえすれば、支配は完了する。あとは懇親会で、うまいワインやら和牛やらを食べて談笑し、ロビー活動と対話が重要ですね、とのたまっておればいいのだ。くそったれ。

本書の冒頭からショッキングな事例があげられている。官僚制と書類作成と業績評価なるものが、一九四〇年代と現在を比べると、莫大に増殖しているのだ。莫大に増殖しているのにもかかわらず、今やこれらは空気のような存在にすらなってしまっている。大学の末端にいてもそれはひしひし理解できる。研究費を得るために、大量の書類を書いたことがある。落ちることもあれば、通ることもある。通ったら通ったで、いちいち研究費の使途を記述しなければならない。一番馬鹿馬鹿しいと思われたことが、書籍を買う際に起こった。書籍一冊一冊に、自分の研究との関連性を記せと言われた時には、さすがに腹が立ち、事務室のカウンターで小一時間吠えたことがある。またこんなこともあった。ふと思い立ち、幼い頃に離婚してしまった父がたの祖父と曽祖父の名前を思い出したいがために、戸籍だか住民票なるものを取りに行ったことがある。子どもから祖父の名前と曽祖父の名前を聞かれたのに答えられなかったからだ。私はこれまで十数回引越しを重ねているので、いちいちその役所に問い合わせて、戸籍やら住民票をたどらねばならないそうだ。もう面倒臭くなって、結局自分探しならぬ、先祖探しはやめた。

枚挙にいとまがない。皆さんも経験があるかと思う。本当に馬鹿馬鹿しい。しかしこれらすべて、私たちを縛り上げるために編み出されたものだ。官僚制の発端はもちろん軍隊の管理体制にあるのだが、それを今の複雑怪奇な官僚システムと密接な仕方で郵便制度が発展したとグレーバーは述べている。今となっては一見無害に見える郵便制度は、官僚制の温床だ。ここから触発されてレーニンはロシア革命ののちに、強大な官僚機構を作り上げていった。ボリシェヴィキにとどまらず、現在の企業や国家にまでこの官僚機構の在り方が拡大し、私たちを締め上げていくことになる。

私たちを締め上げる一方で官僚制には夢が満ちている。もちろん、レーニンの革命後の世界の制度設計の際にユートピアが作られるものとして官僚制は機能した。また加えて、これは驚くべき視点だと思うのだが、官僚制はゲーム形成する。ある一定の規則の中にこそ、自由を垣間見させることで、私たちはその迷宮に入り込んでしまう。自由はもはや規則の内側からでてくるものとして本書では余すところなく語ってくれている。そして規則もまた空気のようになってしまい、不可視のものとして存在するようになる。フーコーによる分析が想起された。権力の在り方が古典主義時代からフランス革命以降になるにつれ、身を潜めるようになったという分析だ。ここには歴史の断絶がある。グレーバーもまた、事細かに、官僚制という一つのあり方を、様々な文脈でそれぞれ断絶させつつ、両義性をもたせながら、豊富な事例を盛り込み、官僚制のアレンジメントを語ってくれている。

本書は面白い小話に満ちているが最後に二つほど。一九八〇年代から、金融界や企業世界に奇妙な概念が跋扈するようになったという。「ヴィジョン、クオリティ、ステイクホルダー、リーダーシップ、エクセレンス、イノベーション」などなどだ。これらの語は、気づけば様々な領域に拡大している。大学の末端にいる人間からすれば、イノベーションという概念が学科の名前についていたり、大学のアドミッション・ポリシーだったりにあるのを見ると、正直、笑ってしまう。しかし笑っていられないのが現状だ。それともう一つ。「もしジル・ドゥルーズやミシェル・フーコー、あるいはピエール・ブルデューの生まれ変わりが現代の合衆国の大学世界にあらわれたら、かれらは大学院すらうまく修了できないだろうし、もしそれができたとしてもテニュアにかんしてはほとんど確実に拒否されるであろう。うすうすそれをわかっていて罪の意識を感じながらも、わたしたちの大部分がスコラ学者よろしく、一九七〇年代以来のフレンチ・セオリーに、いつはてるともない注釈を施しているわけである」。

勧善懲悪の議論ではなく、常に両義性の中を行きつ戻りつすることで、わたしたちはようやく官僚制批判を始めることができる。この世界は複雑さに満ちている。官僚制、くそったれ。

（哲学・思想史）